

漁業経済学 学会短信

№ 13
69. 12

大島襄二

(関西学院大学)

6. 沿岸漁村の婦人労働の
実態について

岩崎繁野(海上労研)

7. 沿岸漁業における資源
と経営 八木庸夫
(長崎県水試)

8. 漁家変幼要因の分析 桜井俊文(水統)

大会第二日…集中テーマ。

沿岸漁業の諸問題

4. 沿岸漁獲物の流通機構について

鈴木 旭(北大水産学部)

2. 沿岸漁業における最近の構造変化に
ついて 浅田陽治(水産庁)

3. 沿岸漁業のレジャー化について

西村章作(淡水研)

○ 討論

○ 総会

学会報告・討議の要旨は学会誌上に掲載

する予定であるが、何分にも、大学紛争、

事務局の混乱により大会準備が整わず、集

中テーマの「沿岸漁業の諸問題」も内容的

には深められたとはいえぬうらみもあり、

学会の空洞化を地といったともいえぬこと

もなからう。問題は「危機意識」「問題意

識」の稀薄さと「方法論」的反省がみられ

ぬところにその根があるものと考えられる。

× × × × × × × × ×

次年度の大会については、三重県で開催

されることに決定された。テーマは「現段

階における漁業協同組合の性格」。短信誌

上で少しでも問題、論点を整理して大会に

備えることを事務局としては考えており取

り組み方などを短信を通じてお寄せ願いた

い。(事務局)

第十七回大会準備と 三重県会員の活動

○ 第十七回大会準備

三重県会員は、来年度の大会の開催地が
地元指定されたので、大いに張りきって
います。その準備状況と其の他会員状況と
を報告します。

○ 第十七回大会準備

本年の沼津大会の後、清水(理事なので
が中心になって津市在勤・在住の会員が数
回の会合を開き、大会の準備を進めていま
す。現在までに決められた案の概要は次の
通りです。

(一)日程 五月十五日 理事会

十六日 研究発表

第十六回漁業経済学会 大会開催される

第十六回大会は漁業経済学会始まって以
来の全員とまり込み、事実上の拘束を意図
して沼津の公務員宿舍臨海荘で五月二三日
二四日の両日開かれた。にも拘らず参加人
員は予想を上廻る六〇人余、朝九時から報
告も開始され、例年よりは実質的な時間が
多く、参加者からは「しんどい」の声もあ
がっていた模様。

大会第一日…一般報告

1. 漁業における資源利用の経済問題

長谷川彰(南海海区水研)

2. 戦前における北海道水産物市場の展

開 池田 均(北大農学部)

3. 青森市における鮮魚の流通機構につ

いて 境 一郎(函館水高)

4. 下関市におけるねり製品加工業の諸

問題 中込暢彦(水産大学校)

5. 駿河湾周辺の真珠養殖業

十七日 シンポジウムと総会
十八日 見学旅行

(一)シンポジウム……最近三年間は「流通」、「中小漁業」、「沿岸漁業」がとりあげられてきたが、これらに関連し、在京理事会の提案に従い、漁業協同組合問題に視点を当てるべきだと考え、「現段階における協同組合の性格」を掲げました。各方面から協同組合問題が掘り上げられ、実りのあるシンポジウムになるよう会員諸氏に願います。

(二)見学旅行……的矢湾・英虞湾を中心に、三重県の特徴をもつ漁業・養殖地の見学を予定しています。

(四)会場および宿舎……参加者の見込みを従来の大会と大差ないものとして、津市の国民宿舎を予定しております。

(五)懇親会……十六日または十七日を予定しています。

○その他、会員の動向

大会準備を始めた頃、幸先よろしく、次の通り新たに三人の入会がありました(五音順)。

浦城晋一氏 (三重大学農学部農政教室)
鈴木敏章氏 (三重県庁漁政課)
田中正氏 (三重県漁連漁政部)

これで三重県の会員は二十二名になりました。浦城氏は真珠養殖業経営についての研究を深く進め、講演、論文等で活潑な活動をしています。この度これらの集大成としての著作をなしたとげ、来春三月に出版の運びとなる見込です。

一方、和田氏は最近刊行された「尾鷲市史」上巻(八五〇頁、明治四年までを採上げてい)で漁業部門を担当しました。この書は二千年という短い期間に成されたものですが、和田氏の日頃の漁業史研究がものをいって内容はよくまとまっています。同時に、許容紙幅の少なかつたため脾肉の嘆を感じしめるものもあります。

宮原九一氏は三重県漁連を率いる専務理事であります。実務家としての活動とともに学究的な思索も深く、漁協問題については他県の講演会の演壇にも招聘されていますので、来たるべき大会でのシンポジウムが楽しみです。県内会員に関し些か自画自讃に傾いたようですが、寛恕を乞うて頓首します。

(三重県大水産、清水・松本)

学会の財政について

事務局

昭和四三年度は、大学紛争の影響をまともにくれたため、事務が停滞したこともあって、財政状況は急速に悪化してしまいました。とくに会費収入と寄付金・会誌売上げが予算をはるかに下まわり、財政悪化の大きな原因をつくりました。とくに会費収入は数年来、予算を下まわっています。これは、一つには、会費納入率が全会員の五〇%以下という状況が続いていることに起因しています。財政の悪化は学会活動、とくに会誌発行を制約しています。

そこで、四四年度は、会費徴収に努力し、財政を改善しようと考えて予算を組みました。

学会は会員によって維持されることは当然のことですから、会費収入に依存するの当然です。学会財政の立直しは、会員各位の協力によらなければできません、ご協力をお願いする次第です。

四四年度予算は、ここ数年の会員の学会への姿勢そのままでは実行困難です。しかも、この予算が実行されたとしても、学会活動を正常化するには、さらにもう一歩

の努力が必要とされます。

学会の財政状況は以上のとおりです。

第十七回大会

一般報告

シンポジウム報告申込み

○報告申込み期日

昭和四五年三月一五日

○報告要旨

しめきり期日

昭和四五年四月一五日

原稿枚数

四〇〇字詰 三枚前後。

申込み先

慶応大学 高山宛

学会誌原稿申込み

会誌編集部よりの

お願い

漁業経済研究第十八巻一号・三号の発行計画はつぎのとおりです。会員各位の研究成果をお寄せ頂きたく御願ひ致します。

原稿〆切 第一号 昭和四五年一月末日

二号 昭和四五年六月末日

三号 昭和四五年一月末日

編集上の都合もございますので、同封の葉書に投稿予定など記入のうえ、お里かえし御送付下さい。

会員名簿を本年度は作成したく存じますので、投稿計画の有無にかゝらず御返送下さい。

会員名簿作成への

協力お願い

住所変更の場合は必ずお知らせ下さい。

住居表示が変った人を含めて至急ご連絡下さい。久しく会員名簿を発行しませんでした。会員の要望も強く、財政破綻の折ですが、何とか発行のほこびにこぎつけたと思っております。

一、昭和四三年度会計報告

(1) 一般会計

収入の部

科目	本年度予算額	本年度決算額	備考
会費	五六〇〇〇円	三四一九〇〇円	
ポ一ナス・カンパ	一	九九〇〇	
会誌売上げ・寄付金	二〇〇〇〇	六八八五〇	
広告料	二〇〇〇	一	
雑収入	五〇〇〇	一	
借入金	一	五〇〇〇	
前年度繰越金	二〇一八二	二〇一八二	
計	八五〇二八二円	五七三〇三二円	

支出の部

科目	本年度予算額	本年度決算額	備考
会誌印刷費	四五〇〇〇円	三〇三六八〇円	一六二、一六三、ほか
通信・発送費	三五〇〇	六七一四〇	会誌発送ほか
事務局費	一四〇〇〇〇	一一九〇八六	人件費ほか
会議費	一〇〇〇〇	二二二九八	全国理事会、在京理事会ほか
大会経費	三〇〇〇〇	三八六二四	
負担金	一〇〇〇	一	
雑費	五〇〇〇	四六二五	
未払金・借入金支払い	一五二八二〇	一	
特別会計へ繰入れ	五〇〇〇	一	
次年度繰越	一三四六二	一六五七九	
計	八五〇二八二円	五七三〇三二円	

(2) 貸借対照表

借方			貸方		
科目	金額	備考	科目	金額	備考
現金	七〇四八円		借入金	五〇〇〇〇円	
預金	九五三一		未払金	二六四四三〇	一六二、一六三、印刷
未収金	三〇五〇〇	広告料ほか	剰余金	七一九九	
計	三二一五七九円		計	三二一五七九円	

(1) 一般會計

支 出 の 部

支出の部

昭和44年5月24日

地方通信

広島だより

南西水研 長谷川 彰

南西海区水産研究所内海資源部第三研究室というのが私の所属の正式の名称である。しかし、所内では経営研究室で通る。この通称は、他の所内研究部門と区別できて便利なので、役所の正式文書以外は、所外にもしばしば使わせてもらっている。

研究室といっても、現在のところ、私と外間源治さんとの二人暮らしである。大世帯よりも少人数の方が、小回りがきいて都合のよい場合が多いのだが、海区研究所には所としての特別の任務といったものがあるので、個人研究だけをのんびりやってばかりおれない場面があり、そんな時は人手不足でんてこ舞いをする。

最近では、本州四国連絡架橋調査というのがあった。関係八県との共同調査で、所をあげてこれに取り組む体制がとられている。私のところはその中の魚業班を分担し、架橋の影響の経済的な評価をすることとなった。この種の調査は本来不確定要因が多くてまともにくい仕事である上に、ルート

の優先順位が未決定の現在では、明石——

鳴戸、児島——坂出、尾道——今治の三ルート全部とらあげねばならず、調査そのものは関係県でやってくれるとしても、最終的なまとめをすべてやらされたのでは、とても身がたないことは目に見えている。結局、古いつきあいを種に、水大校・中込暢彦氏、近大・倉田亨氏に助人を頼みこみ、これでなんとかなりそうだと胸をなでおろしているところである。近大からは、さらに多屋勝雄氏も参加してくれることになった。持つべきは同様の友というしだい。

この調査ばかりでなく、研究所が本来やるべき仕事を考えてみると、実は研究室の人員を多少増加しても、それだけでは解決しないことが多い。どうしても、泉水試をはじめ所外の研究者と共同で調査や研究を進めることが必要になってくる。七年前、水研に転勤して以来の仕事振り返ってみても、泉水試との共同調査が一つの柱になっている。山口泉水試の安村長氏、福岡県豊前水試の多胡信良氏、大分県水試の工藤勝宏氏、宮崎県沿岸漁業指導所の田正文男氏等が内海周辺水試における経済研究の重要な戦力である。安村氏は内海から外海水試場長になって仙崎へ転任されたので仕事の上での直接の結び付きはなくなったが、

工藤・田正両氏とはここ数年日向灘・豊後水道域のイワシ漁業調査を共同で行なっており、多胡氏とは「栽培漁業」の問題で、特に来年ぐらいからまた本格的な共同調査が組めそうである。

ところで、研究所が大野に新設されて、九月から新しい庁舎に通っている。前の研究所（宇品）からみると、自然の環境が大分よくなった。研究室から見る宮島の風景はすばらしい。假たなびく島影は浮世の苦勞を忘れさせる風情がある。この風情につきまこまれて、研究の方まで眠りこんでなるまい。ともあれ、広島へ来られた際はたち寄っていただきたい。住所は、佐伯郡大野町丸石、電話は安芸大野・(5)〇六六六、広島―岩国間の郊外バスで林が原下車、埋立地にできた「水産試験場」と聞けばわかります。

編集後記

(丁記)

学会事務局の日大を始めとして、臨時事務局の水産大学、さらに事務局代行の慶応大学も昨年来の学生の叛乱の波に押し流され学会の活動も亦まさに解体状態に陥って以来すでに一年有余、今年も師走の冷たい風の吹く頃となり、一部の人は学会正式解体・粉砕論もささやかれるありさま。もともと解体するには解体の対象が何らかの形態があつてしかるべき筈のものではないか、まあこのところ、せめて解体の対象にでもなるような形態を実は幽霊まがいであつても再出して、かつよく散らすのも一案と学会短信を編集した次第、事務局の意のあるところを汲んで、積極的な「解体論」を短信にお寄せ願えれば幸甚と存する次第。